

---

# ミス・スタート・ストーリー

モッチー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミス・スタート・ストーリー

### 【Nコード】

N7504X

### 【作者名】

モッチー

### 【あらすじ】

まず、題名がセンス無いですねすいません

初めて小説を書きます！練習とか、話のストックとか一切無いです！

でも、頑張って書きます！！

あ、でもあまり文句とかキツイ感じのアドバイスなどはしないで下さい。

基本、誉められて伸びるので！ えらそうにすんな

## 1話 理不尽だ！！（前書き）

ホントに初めてで緊張です、不快だったら読まなくても良いです

## 1話 理不尽だ!!

「しまったあああ!!!!」

そんな叫び声を聞いて、俺は目を開けた

回りを見渡すと、なんか黄色いモヤモヤした霧的なものに包まれていて

いかにも夢の中って感じがする非常に描写しにくい感じな場所で、しかも体は動かない

そしてローブを身に付けた、声的に男であるだろう2人が居た

男1「どうしよう、へんなのが出てきた」

(へんなのだと?失礼なやつだな、大体ここは何処なんだろう?)

男2「ある意味スゲエな、たまたま地球からシャルローラに迷い込んだ鳥を、地球に戻す魔法を使ったらかわりに人を呼び出すなんて」

(シャルローラ?聞いたこと無いな...どこだろう)

男1「ヤバいよなあ?俺:クビかもだよなあ?」

男2「上司にバレたらまずいな」

男1「よし！良いこと考えた！！」

男2「なんだ？」

男1「こいつをシャルローラに入れてしまおう」

（なんか得体の知れない所に入れられるの！？）

男2「は？お前そんなことしてバレたら…」

男1「バレル前に入れちまえば良いんだよ、うん、それでもう、ウヤマヤになるだろう」

（なんか無責任な事言われてる！！）

男2「でもコイツ、何も能力持ってねえぞ、死ぬぞ？」

男1「良いんだよ！！もう知らねえ！！」男1はどっかに行った

男2「はあ、このまま放っておくのもなあ…死なないように俺からささやかなプレゼントをやるよ、元気だな」

（ちよつと死ぬって！？待ってよ、おい！！）

そこで俺は目が覚めた

……ああ、なるほど いわゆる夢オチってやつだね？

OKOK、大丈夫、今、俺は夢見がちな中学2年生、中二病が出やすい時期だ

ちよつとへんな妄想もしたつて、しょうがないじゃんか

ふうふう、つと息を吐き、起き上がると、目の前は

青い空！白い雲！そしてどこまでも広がる草原！！（向いっつに小さく町が見えるが）

「……………ここはどこだあああ！！！！！！！！」

人が居ない草原の中、俺は1人叫んでいた

1話 理不尽だ!! (後書き)

読んでくれてありがとうございます  
出来れば毎日更新したいです

## 2話 どうしてこうなった!?(前書き)

毎日更新する。という決意を早くも断念しそうだった作者です

## 2話 どうしてこうなった!?

いきなりだけど

俺の名前は「八橋 翔太」「やつはし」「しょうた」って読みます

……別にね？作者が

「ヤベエ！主人公の名前書いてねえ！！」って慌てて2話目で名前をくいこませた訳じゃないよ？

ちょっと気分的に名前を言いたくなっただんだ……

まあ、それは置いていて

今俺は、奴隷達を戦わせるコロシウムに來ている……なぜか選手として……

おかしいなあ、さっきまで草原に居たはずなのに……

(…どうしてこうなったんだあ！！)と、声をおし殺して俺は思っていた……

くさかのぼること1時間前

叫んでもしょうがないので、とりあえず町に向かった俺は、1人考えていた

(まず、ここはどこなんだ?)

(もしかしたら、ホントにファンタジー世界に？)

…イヤイヤ、無い無いさすがにそれは無い)

(どうせ、北海道の草原かなにかだよ。ってかむしろそうであってほしい)

と、ポジティブにあくまで平静を保って願ってた俺の願いは、町に着いた瞬間、とあるツンツン頭の主人公が幻想をぶっ壊す感じで粉々に砕け散った。

「なんだよ、これ…！」と思わず声を出してしまうほど、その町は地球の町とは違っていた

人々はいかにもファンタジックな色とりどりの服を着ており、家や店なども現在の日本では見たことも無く、とてもキレイだった

(…あー、なるほどね、俺はどっかの外国に居るんだ、そうだよ、多分ヨーロッパ的な所に)

と、未だに諦めずに否定していた俺は一瞬で崩れ落ちた

(ひ、人が…空を飛んでる！?!?!?)

大人数ではないが、数人が完全に空を飛んでいる。

注意して周りをみわたすと、手から火を出したり物を宙に浮かしている人も居た。

(嘘…だろ!?マジでファンタジーの世界に来ちまったのか!?俺は!)

完全に希望を失い、絶望に陥る……かと思いきや、そこはまだ中学生なので

(でも、元の世界よりも夢があるし、元々こういう世界に来てみたかったんだ!!)とポジティブ(っっていうかバカ)に考えたため、悲観することはあまりなかった

(スゲー!空飛んでる!!)

スゲースゲー!!)

(火もだしてるよ、俺も出してみたい!!)

と、ファンタジー世界に感動していると、3人組の男達により、いきなり羽交い締めになれて、裏路地へ

(くっ!なんだよコイツら!!)「離せよ!!」

しかし、男達は全力を抜いてはくれない。

男達「お前もバカだな、こんなところで1人でブラブラしてるんなぜ…よつぼど田舎から来たのかあ?」

ゲヘへ、と、胸くそ悪い下卑た笑い声が聞こえる

(くそ!なんだよコイツら!!とにかくなんとかして逃げなくちゃ!!)

と、俺が焦るが、男達は慣れた手付きでなにかを取りだし、嫌がる俺に無理やり臭いを嗅がせた。

(うっ、ね…眠い。ダメだ!寝たら、なにを、され、る、か…)

バタツ

そして抵抗虚しく俺は裏路地で、男達に寝かされ連れていかれてしまった……

どうやら、この町……っていうか国……世界そのものが、奴隷を廃止するという考えが無かった

そして案外、治安も悪い町だった。

そのため、武器も持っていない、他の誰かと居るわけでもない、体がムキムキなわけでもない、ただの中学2年生がブラブラ歩いてたら……結果は火を見るよりも明らかで、ソッコ―捕まり奴隷にされ、コロシムに出場させられてしまった……というのが、1時間前の出来事だ。

(ヤバイ……ファンタジーは楽しい！とか楽観的だった俺を殴り飛ばしたい……(ーー-#))

とか、イライラしているとアナウンスが入った。「え、コンビが決まりました。掲示板に貼ってあるので、確認して下さい。」

ぞろぞろと他の人達が掲示板へ向かい、俺も1人、ぶつぶつと文句を言いつつも、掲示板へと向かった……

## 2話 どうしてこうなった!?(後書き)

コンビってなんだ??とか、意味わからない所もありますが、3話等で明らかにしていきます。どうぞ、これからも読んでいって下さい。

### 3話 ヒロイン登場！！！（前書き）

更新したのが12時過ぎだけど、毎日更新は継続中だと信じている、作者です。

### 3話 ヒロイン登場!!!

アナウンスを聞いた俺は掲示板に来たのだが、悲しいかな、人だかりに押され全く見ることが出来ない。

身長は少々同級生より高い翔太だが、大人達に囲まれるとやはり大ききさやガタイが負けているため、上から覗きこむことも出来ない。かといってチビでもないため、下をくぐるのも不可能だ。

「はあ、もつと早く来れば良かった。」  
と今さら後悔している...

「ねえ、ヤツハシ・シヨウタって君？」  
という女の人の声がいきなり後ろから聞こえたため、驚いて振り向くと

そこには、今までの人生で見たことないほど綺麗な女性が立っていた。

身長は俺とあまりかわらず、赤茶色の髪を腰辺りまで伸ばし、体型はもうモデルさんのようで、とてもきれいだった。

俺はみとれて、ただポカンと口を開けていると

女の人「あの、聞いてる???シヨウタって君?」

そこでやっと我に帰った俺は一瞬、敬語かタメ口か迷ったが、顔は若そうなので「っーかキレイ」タメ口で話すことにした。

俺「あつ、うん。俺が翔太だけど…？どうしたの？」

女の人「えっ？掲示板見てないの？一応私とペアなんだけど……。」

（なに〜！?!?!マジで?!?俺とコンビなの?!?良かった〜、ゴ  
ツイおじさんだけは避けたかったんだ!?!）

（しかも超キレイだし!ラッキー!?!）

俺「えっ!?!?そうなんだ!

俺は八橋翔太、君は？」

女の人「私はファナ。シヨウタなんて名前、聞いたことないわ。」

俺「ま、まあ遠い所から来たし……えっと何歳？」

ファナ「14よ。シヨウタは？」

俺「俺も14!?!良かった、同い年の人で!」

ファナ「良かった、心細かったの大人の男の人ばかりだったから。  
ヨロシクね。」

俺「うん、こちらこそ。」

……正直に言う、めちゃめちゃ嬉しい!!

だって、こんなカワイイ子とコンビですよ!?!もうテンション上が  
りまくり!

さっきの陰鬱な気持ちなんか吹き飛んだわ!!

と1人で勝手にハイテンションになっていると…

アナウンス「そろそろ一回戦始まりますんで、選手は来てください。

「  
というアナウンズが入ったため、俺達は3回戦目なのでまだだが、  
気持ちを切り替え、コロシアムの事や、色々な事をファナに聞いて  
みた。」

ファナの話によると

この町のコロシウムは毎月行われ、最初の予選は2人1組で戦い、

その中で勝った上位8組がトーナメントへと上がる。

そして、トーナメントに出られなかった組の中から、敗者復活戦が  
行われて、4組が勝ち上がる。

で、その4組をコンビではなくバラバラにして、先ほどのトーナメ  
ントに上がった8組に入れる。

要するに、トーナメントは敗者復活戦で勝った選手と合わせて、3  
人1組で戦うのである……らしい。

「らしい」と言うのは、今俺も初めて聞いたし、前はそういうル  
ールだったため、今回もそうであるだろうという、ファナの予想な  
ので、絶対その通りではないかもしれないからだ。

ちなみに、優勝すれば正規の騎士達と戦う権利がもらえ、その騎士  
に勝てば奴隷から開放される。

しかし、もう30回近くも開いているコロシウムだが、未だに開放  
された人は居ないと聞いて、俺は少々疑問に思った。しかし、とり

あえず話を理解するのが必死で、深くは考えなかった。

「ファナ」とりあえず、武器と防具を用意しましょ。レンタルする場所があるの、来て!!」

と言うファナに連れられて着いた場所は凄かった。

武器や防具がズラリと置いてあり、たくさんの人が装備を整えていた。

俺はRPGの世界に来たような感動も感じたが、同時にこれだけ色々装備しなければ、死ぬという事実にも恐怖も感じた。

このコロシウムは基本的に殺してはいけないし、降参したり、戦えない状態に2人ともなれば、その時点で勝負が決まる。

しかし、それでも毎回数人の死者を出すため、平和ボケの日本で生きてきた俺にとっては、本当に恐ろしかった。

しかしなぜか、逃げるや、隠れる、錯乱するなどは無かった。

多分、コンビがいるため、俺が逃げるとファナにも迷惑がかかるという、妙な責任感のお陰で平静を保てるのだと思う。

「ファナ」大丈夫?怖くない?

私はこれでも一応、ある国の近衛騎士の隊長やったから、戦場にはなれてるけど...シヨウタは多分一般人でしょ?」

俺「マジで!?スゲーな。俺はま、まあ、よ、余裕余裕、任せろって。」

前言撤回。全然平静を保ててない上に、根拠もない強がりを見せている。

しかしファナは

ファナ「そっか…」

と、それだけを言って、追及はしないでくれた。

それから一時他愛もない会話をしていると

ファナ「そういえば ショウタの特殊能力は？」

俺「……は？」

(特殊能力？普通無いだろ？……なんか「あるのが当たり前」(^^)「みたいな感じで聞かれて、超怖いんですが……」)

ファナ「いや、『は？』じゃなくて、あるでしょ？

この世界の人は産まれたときから、魔法が使えたり、何かの才能を持ってたりして、特殊能力をみんな持つてるんだから。」

(……無いわー!!どうしよう……無いとか言い辛い) - . . . ( )

俺「え〜と、ない…かな？」

ファナ「うそお (^^|^^)「冗談でしょ？」

俺「残念ながら……手は…尽くしたのですが……」

ファナ「そんな…先生！嘘なんでしょ！？特殊能力は…特殊能力は

無いんですか!？」

「何気に、ファナはノリが良い事を知った」

俺「誠に申し訳にくいですが……」

ファナ「……ホントに?冗談抜きで?」

俺「ごめんなさい!!」

ファナ「ガン!!( ; )」

ファナ(そんな、なにも能力ないって…マズイよね(^| ^ ;))

俺「あのおく、ファナさん?」

ファナ「ハア、分かったわ。基本私が倒すから、サポートヨロシクね。」

俺「ありがとう!そしてごめんなさい。」

ファナ「ちなみに私の特殊能力は レベル4 の「最強」で「剣の使い手」だから、よろしくね。」

俺「レベル?最強??なにそれ??」ファナ「ホントに何も知らないのね。」

レベルは、生まれもった能力の強さで、5が最強なの。

で、「最強」っていうのが、生まれもった能力をどこまで磨き抜いたかを表していて、6段階で最強は2番目に良いの。ちなみに上から順番に、

悟り、最強、強、中、弱、見習い、ってなってるわ。

そして 剣の使い手 は種類。自分で名前つけてもいいし、公共で決まってるのを使ってもいいの。ちなみに私は公共で決まってるのを使っているわ。」

俺「へえー、そんなのがあるんだ。」

(確か、前にローブの男が、「ささやかなプレゼント」って言うってたけど、なにか力をくれたのかな?)

ファナ「じゃあ、説明も終わったし、武器や防具選びましょう!」

俺「おう。」

選んで気付いた事がある……全部が重い!!!!!!

ありえねえよ、あのなかで俺が、振り回したり出来た武器が1個だけしかない超軽い剣だけだよ!!!

盾とか、重すぎてどれも持てねえし!!!

そして、最終的に決まった装備が…

(ファナ) モンスターハ ターの太刀みたいな剣に、センスのいい感じの、軽い防具で、盾はなく剣は自在に操り、カッコよく素振りしている。

それに比べ俺は

剣の持ち方も素人で、一応、ゼ の使い魔の、人間の使い魔のよう

な構えで、兜も鎧も1番軽いやつで、ほとんど体を包んでおらず、盾はない、重いため剣もすばやく降ることが出来ないでいる。一応、さっき腕相撲したところ、力は俺の方が強かった。しかし剣を持つと、ファナは通常の力の5倍はでるらしく、軽々と剣を持つことができている。

……俺カッコわる!!

泣きそうになった。

### 3話 ヒロイン登場!!! (後書き)

今回は長くて、説明が多かったです！  
分かりづらかったらスイマセン。

今 俺は中3で受験です……小説書いてる場合かよ!!!と自分でツッコんでいます。

これからも読んでやって下さい!!!

#### 4話 予選！！初勝負！！（よつやく）（前書き）

知り合いに何も言っていないのに、この小説について知られてた……

……。知り合いに知られると、恥ずかしいですよね？

その知り合いは別にバカにしたりしないんですけど……やっぱり恥ずかしいです。

#### 4話 予選！！初勝負！！（よつやく）

ついにこの世界に来て、初めての戦いが始まるうとしている。

ちなみに俺達はその前の試合を「参考にする」って言って、フアナが止めるのを無視して見たせいで、恐怖が3倍に膨れ上がっている。超後悔している。

まるで、知り合いのお姉さんに自分の創作小説を読まれて、しかも感想まで書かれていた時の作者のように後悔している。

フアナ「もしもし、生きてますかー？」

俺「……………」

フアナ「返事がない、ただの屍のようだ。」

俺「死んどらんわ！！えんぎでも無いこと言っな！！」

フアナ「だってさっきから、全然話を聞いてくれないんだもん！！」

俺「ああ、ゴメンゴメン、なにかあった？」

フアナ「いや…楽しみだね！って言いたくて……………」

俺（ヤバツ、可愛い…………って俺のバカ野郎！！）

俺「た、楽しみなわけがねえだろ！怖いわ！」

フアナ「……やーい、やーい怖がりや〜（^ ^）」

俺「な！……んなの全然怖くねえし？マジ余裕だし？」

フアナ「じゃあ、今回はシヨウタに全てお任せで。」

俺「やだなあ、フアナさん。なんの「冗談？」

フアナ「いや、マジで。」

俺「うわあ！ゴメンなさいってフアナさん！！」

フアナ「楽しみだねえ〜」

俺「ギャーっ！！」

と俺が死刑宣告されたところで

アナウンス「はい、では次の人は準備して下さい。」

フアナ「あつ、私達の番だ、用意しようつと」

俺「ちよつと待って、さっきの話は冗談だよね？もしも〜し！！」

こんな感じで大丈夫なのかひたすら不安だったが、俺も準備に取りかかった。

司会の人「それでは、3回戦を行います。まず赤コーナーは、ヤシヤ&amp;mp;テイルコンビ！！」

観客（わぁー！！）

歓声と共に相手コンビが出てきた。

ヤシャと呼ばれる人は小柄の男で双剣を持っており、見た感じでは、あまり強そうでは無い。

ちなみに上の画面にヤシャの特殊能力が載っており、レベルは2。

強さは弱。

名前は「ダブルソウル」とか言う、……センスは皆無だ。

公式名は、「双剣の使い手」

テイルと呼ばれる人は、同じく小柄な女の人で、いかにも魔法使いな感じの服装である。

そして上の画面には、レベル2。

強さは 中。

名前は「炎の使い手」

公式名称を使っている。

司会「対するは、青コーナー！！ファナ&amp;mp;シヨウタコンビ  
！！！！！！」

メツチャ歓声を受けて、俺達は出てきた……が。

ファナが出てくる。

観客「わぁー！！」

俺が出てくる。

観客「わぁー……えっ!？」

俺の上画面にはデカデカと「能力無し!!」(笑)と書かれている……バカにしてるだろ!! (されてます)

会場はメツチャ笑ってやがる……せめてファナは……と顔を見ると、惜しげもなく笑顔だった……。

もう いいやい!!

と、拗ねて何もかも投げ出したくなる衝動にかられる。

まるで、知り合いのお姉さんに自分の創作小説を見られた作者のように。

ようやく笑いが止むと、今度はいたるところで歓声が聞こえる。

この歓声はもちろん、俺ではなく、ファナだ。

レベルが4でも充分スゴいのに、最強ときているため、イヤでも驚かれる。

まあ、俺もある意味スゴいんだよ?(泣)

紹介も終わり、そろそろガチのバトルが始まる。

なんかやっぱり緊張するし、怖い。

カーン!!

ゴングが鳴ると同時に、ファナが小声で「双剣野郎は任せて！魔法使いをおねがい。」とだけ言うと、ものすごい速さでヤシャとの差を詰めていく。

ファナに言われた通りにテイルと言う名の彼女に体を向けると、なにやらゴニヨゴニヨ言っている。

テイル「ゴニヨゴニヨ……ファイヤーボール」とようやく聞き取れた声に俺は疑問をもった。

(ファイヤーボール？えっ、それってどんな奴なんだr)

とそこまで考えたところでいきなり彼女の手から炎の玉が出てこっちへ飛んでくる！！

俺は急いで横っ飛びに飛んで、それを回避した。

外れた玉はそのまま直進し、壁に大きな衝撃を与えて分散した。

俺は極めて何事もなかったように立ち上がった。

俺(……怖えええ。)

訂正。やっぱりビビってた。

俺(あれなんだよ！！火がブワアって！……当たったら死んでたな……。)

ファナ「ボーツとしないの！！シヨウタ！！！！」

はっ！と我に帰ると、前から3個の火の玉が！！

火のあいだをぬって避けるほど上手くはないため、1つは横に走ってよけ、もう1つはしゃがんで、最後はまた横っ飛びでと、どうにか避けた。

危ねえ（・・・）

……そろそろ攻撃するか！！

俺はダツシュで距離を詰める！！

相手はぶつぶつと何かを言っている。

なにかな？と疑問に思いつつも走っていると、いきなり横のファナから声が！

「キヤー！」

どうしたんだ！

とファナを見ると、ファナの周りの地面から炎が噴出し、身動きが取れなくなっている。

俺「ファナ！！」

ファナに駆け寄ろうとすると

ヤシャ「にいちちゃん、よそ見してて良いのかあ？」

と始めから打ち合わせをしたらしく、すぐ近くにヤシャが迫っていた。

俺「クソッ！」

体をひねり、初撃はかわせたが、バランスを崩し、倒れてしまう。

ヤシャ「ヒヤッハー！！」

倒れた俺にめがけて、剣が降り下ろされる。

俺は横に転がり、避けて急いで立ち上がり、そしてダッシュで逃げた！！

ヤシャ「逃げんのかあ！？腰抜けが！！」

俺はこんな状況でも何故か冷静だった。

俺（落ち着けよ、俺。まずは魔法使いを倒して炎を消さないと、フアナが危ない。）

（そして、俺じゃあヤシャは倒せない。）

と情報を分析すると、テイルまで走った！！

テイルは、フアナの周辺の炎の維持で精一杯だったのか、うずくまっている。

しかし、ヤシャが追い付いてきた！！

ヤシャ「ヒヤッハー！！お前は無能力者だろうが！！大人しく死にやが……ぐわっ目が！！」

俺は先ほど立ち上がった際に持っていた砂を、相手の目にめがけて離した！！

ヤシャの目に命中！動きが鈍くなった！！

俺「今だ！！」前を向き、テイルを見ると、なんと気力を振り絞って、ファイヤーボールを出していた！！

気づくのが遅すぎたため、かわしてみたが肩に当たってしまった。

ドン！！

そんなに強くないが、右肩に激しい痛みが！

俺「ぐつ。」ヨロつと体がふらつく、ヤシャが双剣を構え突進してきて、ここまでか！？と思つた次の瞬間、

ファナが剣を受け止め、はじきとばしていた。

テイルが「なんで火が消えたの！？まさか剣を振る風圧で！？……いや、そんなはずは……。」と焦つた声を出していた。

ファナ「よく頑張つてたね。……後は私に任せて！！」

それだけ告げると、あっさりヤシャを気絶させ、テイルにファイヤーボールを撃たれても、剣を振つた時の風圧のようなもので消して、一気に距離を詰める。

テイルも剣の柄で殴られ、あえなく気絶した。

審判「勝者、フアナ選手！！！」

観客「わあ〜！！！」スゴイ歓声の中、俺達の初の戦いは幕を閉じた。

ちなみに審判さん、一応コンビなんで、勝ったときは俺の名前も…。  
…。  
そこまで考えて、俺は気絶した。

目を覚ますと控え室で、肩には包帯が巻かれている。

フアナ「あつ、起きた？大丈夫？」

俺「あつ、ああ、大丈夫だけど…なんで早く倒さなかったんだよ。」

フアナ「ごめんね？いや、シヨウタの力を測ろうと思ってね？それで…。」

俺「はあ〜、俺一人でバカみたいじゃねえかよ。」

フアナ「ホントにゴメンって、怪我まではさせないって、思ったんだけど…ゴメンなさい。」

俺（そこまで謝られたら、何も言えねえじゃねえかよ。俺が弱いのが悪いし）

俺「ああ、もういいよ。」

フアナ「ホントに？良かった。ホントにゴメンね。でも、ビックリしたよ！戦い方が上手だったよ！！」

俺「……そうか？」

フアナ「うん、そうそう！倒れたときに機転をきかせて砂を掴んでそれを利用したり、能力の差があるのに、戦えてたよ！！！」

俺「いや、そんなことないよ、普通な事してただけだし、結局負けたし。」

フアナ「イイヤヤ、よく頑張ってたって！！スゴかったよ、カッコよかったよ！！」

俺「マジで？ありがとな、ほめてくれて。」

本音（やったああ！！カッコいいって！戦えてて、スゴイって！！嬉しいよ俺は！！）  
メチャメチャ単純

フアナ「今日はもう試合ないから、ゆっくり休んで（^- - ^）」

俺「ああ、ありがとう。ちょっと寝るよ。」

フアナ「うん、おやすみ。…あつ、はしっこに寄っててよ、私が寝れないから。」

俺「ああ、やけに広いと思ったらダブルベットかなるほどね、分かったよ、はしっこに………は？」

ファナ「？ どうしたの??」

俺「どうしたのじゃねえ!!!!」

俺「なんで一緒のベッドだよ!!」

ファナ「だってそれしかないし、しょうがないじゃん。」

俺「イイイイイイヤ、しょうがなくねえよ!?なに言ってるんだ!!」

ファナ「でも地面は固いしソファーとか無いしどうすんの?別に同じでいいじゃん。私は別にイビキがデカかるうが、汗臭いだるうが、あんまり気にしないよ?」

俺「俺がマズイの!!ああ、もういいや!さっさと寝ちまおう!!おやすみ!!」

ファナ「うん。最初から寝ればいいのになに焦ってるの?おやすみ。」

さっきの戦いより(気を使うから)疲れそうだな、と俺は思いながら、眠りに落ちた。

4話 予選!!初勝負!!(よつやく)(後書き)

戦闘シーン疲れました？

小説自体を、書くのが初めてなので戦闘シーンも初めてだから、大変でした。

しかも、今日は7時間も塾でした……殺す気か!!

## 5話 休息の日(前書き)

スイマセンでした。2日間も投稿してなくて。

忙しかったんです!!

これからは、最低3日に1話投稿するようにします。

## 5話 休息の日

朝だ。小鳥がチュンチュン鳴いてる。

自分が奴隷で、無理矢理コロシムに参加させられてることを忘れさせるほど、爽やかな朝だった。

俺はいつも朝起きてても、なかなか目を開けない。

いつもこんな風に、1人で物思いに耽つてから目を開ける。

(ああ、何気にまだこのセカイに来て2日しか経ってないんだな。)

大きく息を吸う……なぜか優しい香りが。

体を動かしてみると、柔らかいものや少々固いところがあるものに手が当たる。

耳をすますと、「スウスウ」と寝息が。

イヤな予感がする……。

おそるおそる目を開けると、目の前にファナの寝顔が……。

俺「うわあああ……！」

おもいつきり後ろに下がったため、ベッドから転落。

相当うるさい音がしたが、ファナは少し身動きすると、またスウスウと規則正しい寝息をたてた。

俺(落ち着こう、そうクールに。大丈夫だ、何も心配はない。……)

…落ち着いたらとりあえずするべき事は1つ!!)

俺「ファナの寝顔を覗こう!!」 (パニック中なため、正常な判断出来ておりません)

今の叫びでファナが起きるか心配したが、むにゃむにゃと寝言を言ってる。良かった。

ファナはとてもカワイイ顔立ちだ。まつ毛は長く、頬は軽く赤くなっており、唇など全てにおいて非の打ち所がないと思う。

髪の毛を触ってみる……サラッサラだ!

頬をつついてみる……プニプニしてて、めちゃくちゃ柔らかい。

ヤバイ、ヤバイぞ俺!!

今までも、同級生の女子とふれあったり話したりしたことがあるのに、ここまで胸が高鳴るなんて!!

もう色々とハンパなく、勝手に焦っている。すると

ファナ「うう〜ん……あ、朝だ〜」ビクウ!!

……メッチャビビった。寿命が100年は縮んだ。

ファナ「あ、え〜と。おはよう、シヨウタ。」

俺 (朝から爽やかに笑いやがって!!精神的によろしくないわ!!)

俺「お、おお、おはよ。」

ファナは大きく伸びをして、「あっ、肩は大丈夫？」

俺「うん、もう痛くないよ。」

自分でも驚いていた。ファナに言われるまで忘れていたが、昨日重度の火傷を負った右肩はほぼ元通りに完治し、痛みも全くなかった。

なんか、ファナが知り合いの奴隷の人をお願いして、自然治癒をスゴく高める魔法をしてくれたため、1晩ですっかり治ったらしい。魔法はスゴいな、っていうのと魔法をしてくれた人と、ファナに感謝しなくちゃなって思ったので、とりあえずファナに感謝の言葉を言った。

俺「ファナ、ありがとな。」

ファナ「わわ！？いきなりどしたの!？」

俺「……俺が素直に感謝したらそんなにおかしいかよ。」

ファナ「おかしい、おかしい。天地がひっくり返る。」

俺「そんなにかよ!!」

ファナ「うん。っていうか、さっきさ……………」。

俺「？ どうした？」

ファナ「いや、なんでもない!!」

俺「？ マジでどうしたんだよ？」

ファナ（い、言えるわけないじゃんか……さっき実は起きてたなんて……。）

（数分前）

シヨウタ「うわあああ！！」

そんなシヨウタの声で私は目を覚ました。

ファナ（？ いきなりおっきな声出して……どうしたんだろ？）

シヨウタ「………………。」

ファナ（何考えてるんだろ？っていつか私もそろそろ起きようかな……………）

シヨウタ「ファナの寝顔を覗こう！！」

ファナ「なっ！！何言って……………む、むにゃむにゃ」。 「

ファナ（危ない危ない、起きてるのがバレるところだったよ！！）

ファナ（大体、覗くってなんなのさ！別に見たって良いことないのに……………）

髪をサラサラ〜って触る。

ファナ（うわああ。髪をさわってる。なぜかドキドキする）

シヨウタが頬をプニプニする

フアナ(うわっ！目を開けてないからいきなり触られてビックリする……)

シヨウタがなにもしなくなった。

フアナ(あれ？どうしたんだろ)

不思議に思ったので、薄く目を開けてみた。すると……

フアナ(メツチャ顔が赤い!?)

(なんでなんで!?!なにがあつたの!?)

そして、もう耐えきれずに目を開けてわざとらしく起きた。

回想終了。

フアナ(なんであんなことしてたんだろ?)

フアナ(深く考えてもしょうがない。とりあえずご飯にしよう)

フアナ「ねえねえ、そろそろご飯食べようよ。」

シヨウタ「そ、そうだな！飯にしよう!」

シヨウタは勝手にギクシャクしていたが、特に何もなく朝食終了。

ファナ「よし、昨日の戦いを見て思ったんだけど、シヨウタは剣の練習をしよう！やっぱり能力無しだから、少しでも頑張らないと勝てない。」

シヨウタ「え？…確かにそうだよな。よし！稽古つけて下さい！」

ファナ「分かった。じゃあ……。」

と、ファナは俺と一緒に小さな闘技場のような所に来て、てきぱきと用意を始めた。

どうやら、偽物の剣でケガのないようにしながら、打ち合うようだ。

ファナ「よし、出来た。私はこの剣でいくよ。」

俺「おう！俺はこの剣だ。」（模擬戦だけど、当たったら痛いし…

…当てないようにしようかな……）

こんな風に稽古をなめていたシヨウタは、30秒も経つと激しく後悔した。

バシっ！バシバシ、ブン……バシ、バシバシ！…ブン…！

おかしい、剣と剣が打ち合う音がしない……。

ちなみにバシバシいってるのはファナが俺の体に剣を当てる音で、時折ブンと言うのは俺が剣を空振りさせる音だ。

……俺弱っ！……！

自分でビツクリしたわ！！ファナが強すぎる！！  
俺が剣を1回振る間に、3回当ててくる！！

俺はたまらず距離をとるが、ファナは剣を持つと、運動神経が格段に上がる、という能力のため逃げることも出来ず、またリンチにあう。

ファナ「ちゃんと剣を振って！！」

俺「……………」 戦意喪失してます（-.-;）

ファナ「フーン、こんなので音をあげるんだあ？ま、しょうがないね。なんて言ったって【能力なし】だもん！！」

俺「なんだと？能力ないだって？……………よし、やってやろうじゃないか！！せめて1回だけでも当ててやる！！！！」

ファナ「ムリムリ」。」「良かったやる気になって。ショウタは負けず嫌いなんだね。」

……………虚勢を張ったのは良いけど、どうしよう。

まともに行ってもやられる……………逃げても捕まるなら……………不意打ちしかないな！！

俺はダツシュで逃げた！！ファナが追いかける！！捕まる寸前で俺は急ターン！！手も足も伸ばせるだけ伸ばして、ファナに向かって跳んだ！！

ファナはギリッギリで剣で防いだが、剣の威力が強く剣が飛んでいってしまった。そして、その際に俺の剣もぶっ飛ばしたため、2人

とも丸腰。

……他からみたら抱きつくみたいじゃね？

俺・ファナ『うわあああ！！』

ドカーン！！衝突した瞬間ドアが開く。

女子「ファナ！！おはよー！昨日連れてきた男の人は元気ですか？  
つてあれ？……………」

今のシヨウタ達の体制…………シヨウタがファナの腰と頭に手を回して、  
まるでキスするみたいな感じになっております。

女子「…………あ、スイマセン…………ジャマ…………ですよね…………」

シヨウタ& amp; ファナ『待つて…………！！！！！！』

～事情説明～

女子「し、信じません！！……………なんでこの人はファナの腰などに手を回していたんですか！！！！」

シヨウタ「イイヤヤ違っただよ！！話を聞いてくれ！！」

シヨウタ「いいか？まず俺はファナと一緒に倒れながら思ったんだ。  
このままだとファナが体を打ちつけて、痛いだろうって。だから、  
急いで痛くないように手を回して庇ったら、たまたま腰とかに手が  
あっただんだ！！」

ファナ「そうなんだ、良かった。」

シヨウタ「なぜほっとしてるの!? やっぱり信じてなかったんだな  
!」

女子「分かりませんよ、ファナがカワイイから思わず……って可能性も捨てきれません!」

ファナ「もう、そんなわけ」

シヨウタ「そりゃ確かにカワイイけども! ……あ。」

ファナ「か、カワイイ?? ちよつと、え??」

シヨウタ「ああああ、カワイイことは否定しないけど、ううう。」

女子「否定しないんだ!? ちょ、ファナが処理落ちしてます!」

ファナ「プシュ、プシュー! …!」

シヨウタ「なんかメツチャ赤くて湯気が出てる!」

ファナ（カワイイって男子に言われたの初めて……世間では、普通  
言わないらしいし。はっ! …! じゃあ朝のアレは!? 顔が赤かったし  
……もしかして私なんかの事が好き……とか……イヤイヤ無い無い  
……でも、じゃあなんであんなこと……うにゃああ! …) 処理落  
ち。

シヨウタ「ファ、ファナー! …!」

〜数分後〜

ファナ「ごめん、大丈夫だよ。」

シヨウタ「ふう、元に戻って良かった。ごめんな、変なこと言って

」

ファナ「変なこと???... あっ!!カワイイ...プシュ...プシュ。

」

女子「や〜!!せっかく忘れてたのに!!ヤバイですよ。」

ファナ「だ...大丈夫大丈夫!!わ...忘れたよ!!」

女子「...っていうかですね、登場して30分近く経ってるのに...

...まだ 女子 扱い!?名前すら言ってないですよ!!泣きますよ!!」

ファナ「あ、ゴメンゴメン。シヨウタ、この子はね サヤカ っ  
言ってるね、昨日シヨウタを回復魔法使ってくれた人だね!!私と幼  
なじみなの!!」

シヨウタ「そうなんだ。昨日はありがとう、助かったよ。...えっと  
いくつかな?」

サヤカ「な!?!どっからどう見ても14歳ですよ!!失礼ですね。」

どっからどうみてもだど!?!

サヤカの髪は黒で腕くらいまでの長さだ。

スタイルも良く顔も可愛い。しかし！！身長が小さい！！

ホントに地球の中学生と同じ年なんだろうか…？

サヤカ「……………今の心の言葉みたいなやつ……………口に出してませんが）  
- | - #（）」

シヨウタ「げっ……………お、怒ってらっしやいますか？」

サヤカ「昨日助けてあげたのに……………攻撃魔法をぶち当てて良いかな  
（- | - #（）」

シヨウタ「ちよっ、待ってゴメン！！ウソ！！今のウソだから！！」

サヤカ「なら……………ウソつかれて傷ついたので……………攻撃魔法ぶち当てて  
いいですか（- | - #（）」

シヨウタ「俺の体の方が致命傷負うわ！！マジで許してくれ！！」

ファナ「もう、ダメだよサヤカ！！」

サヤカ「でも……………」

ファナ「ダメなことはダメなんだよ。」

サヤカ「…はい、ゴメンなさい……………」

シヨウタ「さすがファナ、ありがと……………」

フアナ「分かってくれたんだ、じゃあ3発以上だけなら良いよ。」

サヤカ「フアナ……ありがとう……!!」

シヨウタ「イヤ待てい!!おかしいわ!!しかも3発以上って!?  
際限なく攻撃魔法撃たれて死ぬわ!!」

サヤカ「じゃあ、最低3発だから今から撃つね」

シヨウタ「ゴメンってば!!……ギャーツ!!……!!」

その後、日が暮れるまで逃げ続けた……死にそうだ。

シヨウタ「はあ、はあ、はあ、疲れた。きつい。」

フアナは風呂に入ってるが、シヨウタは知らなかった。

シヨウタ「あちいー!汗かいたし、風呂に入ろう。」

風呂は部屋ごとに一個ずつあり、とても小さい。脱衣所がないため、風呂場で着替える。

ドアを開けると……絶賛髪洗い中のフアナさんが……。

フアナ「へっ?……」

俺「わわわ!!ゴメンなさい!!」

回れ右して、急いでその場から離れる!!

ヤバイヤバイ、落ち着け落ち着け!!

頭洗ってたから、手をバンザイしていて、身を隠すものはなにも……

…ギヤーツ！…！

忘れる忘れるう…！煩惱退散だあ…！！

と、勝手に暴走していると、ファナが戻ってきた。

ファナ「……………シヨウタ？こっちにキナサイ。」

シヨウタ「なんか後半が死んだみたいになってたよ…？」

ファナ「イイカラ、コツチニコオオイ…！！」

シヨウタ「怖い…！！ファナが怖い…！！」

そのあと、気絶するまで許してくれなかった…………。

……………今日は不幸な気がする……………。

## 5話 休息の日（後書き）

この小説のネタは、けっこう作者が経験してるのが多いです。

全部じゃないけど、4割くらいです。基本的に運が悪いので……。

でもネタにはあまり困りませんがね（笑）

6話 2戦目!!前編(前書き)

遅くなりました!!  
スイマセン?

## 6話 2戦目!!前編

……目を開けるとそこは闘技場で、いきなり大剣が飛んで来て俺を襲った!!

突然のことで動けないでいると、ファナが中に割ってはいり、かわりに剣の一撃を受けた。

ウソ…だろ？

ファナからは血がどんどん溢れだし、真っ赤にそまっっていく……

イヤだ！ファナ！！ファナー！！！！！！

と、ここで目が覚めた。

恐ろしくイヤな夢で、汗をたくさんかいていた。

ファナ「大丈夫？」

俺の顔を覗きこみ、心配するファナが目の前にいた。

シヨウタ「あ、ああ。大丈夫だ…。」

ファナ「ホントに？さっきまでカワイイ寝顔だったのに急にうなりだして、焦ったよ。」

シヨウタ「……カワイイ寝顔？」

ファナ「……ああ。私ね、1時間くらい前に起きて、今までずっとシヨウタの寝顔見てたの。とっっても可愛かったよ？ヨダレも垂らし

ていて。」(ニヤニヤ)

シヨウタ「なっ！！」

ファナ「いや、寝てるときは静かでカワイイのに。……なんで起きるんだろ」

シヨウタ「うおい！！今ヒドイこと言われたぞ！！朝から傷付くわ！！！」

寝顔見られた上に、2度と起きるなって言われた。 (泣)  
超悔しいので、言い返すことにした。

シヨウタ「ふん！そんなの俺だって昨日は充分ファナの寝顔を堪能したもんね！！！」

ファナ「……！！！」

シヨウタ「いやいや、可愛かったな、寝ているファナは。超可愛かったよ」(ニヤニヤ)

ふっ、恥ずかしがるがいい。俺も死ぬほど恥ずかしかったんだから！！  
しかし……

ファナ「や……えと……あう……。」「

顔赤っ！！！！

……違う！！なんか違う！恥ずかしがってほしかったけど、あんな

に赤面されたらこっちまで……。

ファナ（か、カワイイって！！！！ままた言われちゃったよ！！！！）

ファナ「……ひゃいじょうぶだいじょうぶ。」

シヨウタ「嚙んでる！！おもいつきり嚙んでる！！大丈夫じゃねえだろ！！！」

と、こんな感じでうやむやになったが、朝の夢は頭から離れない。あれはなんだったんだろうか……。

アナウンス「それでは、ただいまより予選2試合目の1回戦を始めます！！！」

俺達にとって2回目の試合が始まった。

1試合目の予選に勝ち上がっただけはあって、敵は強そうだ。

ちなみに今回は作戦がある。（シヨウタ作の）

まず、相手はファナを2人がかりで倒そうとするはずだ。

まあ、当たり前だろう。相手は無能力者で、ファナはレベル4の最強なんだから。

で、それをされないために俺があえて1番強い敵につっこむ。

俺が時間稼ぎしてる間に、ファナがパパッと弱いやつを倒して、相手を1人にしてから倒す。

これが今回の作戦だった……。

良い作戦だ！！と、自負してただけど……。

アナウンス「さあ、では両コンビの入場です！！まずはファナ&amp;mp;シヨウタ……！！」

観客「わあー！！！！」

数人はクスクス笑っていたが、2回目なので前より少なかった。

ちなみに、何について笑われているのかというと、俺の画面に「能力無し（笑）」と、デカデカ書かれているためだ（泣）

まあ、ここまででは特に何もなかった。

しかし……。

アナウンス「対するは、ガリック&amp;mp;ユンフ……！！」

観客がどよめいた。

シヨウタは相手の画面を見て、驚いた。

ガリックと呼ばれる、長身で体がゴツい男の能力は……レベル4の【悟り】で名前は 大剣の使い手

（ちなみに、大剣の使い手は大剣しか使えない。双剣の使い手は双剣しか使えない。でも、ファナは剣の使い手だから、どんな剣でも

扱える。しかし専門的な大剣の使い手とファナが大剣で勝負すると、負けてしまう。双剣も同じ)

……ガリツク強し!!!

スゴすぎる!! 【悟り】ってちょっと、おまwww  
負けとるがな、ファナが。

俺の作戦、3秒で壊されたわ。

俺とファナの訓練でもボロ負けなのに、それより強いやつに俺が特攻したって、時間稼ぎにもならねえよ(泣)

と、悲観してる俺をさらなる悲劇が襲った。

ユンフという人は、小柄な女性で、髪も長く、デッカイ杖を持っている。

俺は彼女の画面を見た。

ユンフは 土魔法の使い手 で【最強】の………レベル4だった。  
………こんなの勝てるか!! 絶対負けるわ!!

俺が足手まといすぎるよ!!

ファナを見ると、メッチャ焦っている。

そりゃそうだ、自分より強い奴1名、同じ強さ1名vsファナとレベル0の雑魚シヨウタって……。  
これ何? イジメ??

そろそろ、試合開始だ。

……うわぁーん帰りたいよ。いやマジで。

ファナはさっきから何も言わないし、ホント、帰りたい。

すると、ファナがようやく話しかけてくれた。

ファナ「シヨウタ！お願いがあるの……。」

お願いってなんだろう。

……ああ役立たずは死ねっというお願いかな。（今すぐマイナス思考です。かわいそうなくらいネガティブです）

ファナ「あのね、私がガリックと戦いたいの！！強い人と戦うの久しぶりでね！！嬉しいの！！だから、ユンフは任せても良い？」

嬉しいのかよ！？じゃあ、さっき焦ってるように見えたのは武者震いだったのか。

……ユンフもレベル4だ。楽勝に勝てる相手じゃない。でもガリックには敵わないし、そんなに嬉しそうにされたら

シヨウタ「任せる！！頑張ってガリックを倒してくれよ。」

って言っちまうじゃないか。

ファナ「うん！ありがとう！……でも良く考えたら大丈夫？相手はレベル4で最強だよ？」

シヨウタ「よ……余裕余裕！！マジ楽勝だし！！」

ファナ「…そっか、じゃあ頑張ってね！」

俺が強がりを行っているのを知ってか知らずかファナはそれ以上追及しなかった。

アナウンス「では、用意はいいですね？試合開始！！」

俺達にとって2回目の試合が幕を開ける。

## 6話 2戦目!前編(後書き)

次回、ついにシヨウタに渡された「ささやかなプレゼント」が明らかだ!?

受験生って……マジでめんどくさいんです??

早く終わってほしい

7話 2戦目!!後編(前書き)

更新がスツゴく遅くなってスイマセン!!

受験勉強、めちゃくちゃウザイです(´・`・#)

はよ終われば良いのに。

## 7話 2戦目!!後編

〜前回までのあらすじ〜

とうとう、2戦目が始まった!!

相手はファナより強い人と同じ強さの人がいた!!

まるで、ドラゴンボールの孫・空と、ベジータ、トランクスの戦いに、クリンが混じっているような状態のシヨウタはどうするか!!!!!!

……カーン!!

合図が鳴り、試合が始まった!!

ファナはダッシュでガリックに向かい、ガリックもそれに迎え撃つ。

2人が激突し、すごいスピードで剣が打ち合う。

すごい攻防で、両者とも全く退かない。

ボクッとそれを眺めると、ユンフから土の塊が飛んできた!!

シヨウタ（ふつ。以前にも魔法使いと戦ったから、攻撃パターン読めてるんだよ!!） 調子に乗ってます

一発目を華麗に避け、前を見ると、また土弾が飛んできた。  
……無数に。

シヨウタ「うえええ!?」

と、叫びながら、散弾の様に飛んできた土弾を避けるため、横に  
ひたすら走る!!

……ギリツギリで避けることが出来た。

シヨウタ（あゝ、死ぬかと思った。）

目標を失った土弾はそのまま直進……しなかった。

シヨウタ「マジですか!?!」

なんと、土弾はUターンをしてシヨウタに向かってきた!!

急なことで避ける時間がなかったため、咄嗟に伏せて剣で体を庇つ  
た。

シヨウタ「うっ!?!」

しかし、やはり数発は体に当たり、流血している。

土弾はそこまでデカくはなかったため致命傷には至らなかったが、  
かなり痛む。

ユンフ「はあゝ、なんで私が弱い方を相手にしないといけないのよ。

ガリック様はムダに張り切ってたし。」

シヨウタ（弱い方？…クソっ、バカにしゃがって！！）

ダッシュでユンフに向かう。

ユンフ「……よっと。」

しかし杖を1振りすると、シヨウタの目の前の土が砕け、穴が出来て、落ちれば串刺しになるようになった！！

シヨウタ「うわああ！！！」

とっさにジャンプして、どうにか避ける。

ユンフ「じゃあ、これは？」

また1振りすると、左右の地面の至る所に穴が空いて、そこから砂の蛇が出てきて俺を襲う！！

前転して避けるが、何匹かは避けきれなかった。

シヨウタ「グッ！！！」

またも激しい流血。

シヨウタはもうボロボロだった。

ユンフ「もう、終わり？あゝ、つまんない。」

シヨウタ（チクシヨウ！！どうかならないのか！！まともに突撃してもかなわない。…逃げるか？いや、ファナはガリックと1対1

でもギリギリなのにもしユンフが攻撃したらマズイな。やっぱり戦わないと。……不意討ちでもするか？)

フアナと訓練した時のように、追い詰められたシヨウタは不意討ちをすることにした。

シヨウタ(でも、訓練の時と同じやり方じゃあ、ダメだ。……ユンフは上から目線の性格だな、あとガリックのことを様付けで呼んでいた。それなら……。)

シヨウタ「はっ、偉そうにしゃがって。無能力者の俺に近付きもしくないくせに。」

ユンフ「なに言ってるの？あんなにか近付かなくても倒せるのよ。」

シヨウタ「んな事言ってる…ビビってるんだろ？」

ユンフ「はあ？あんなバカなの？そんな挑発乗るわけないでしょう？」

シヨウタ「ああ、ハイハイ。ビビってたな、お前は。はあ、さぞかしガリックって奴も見た目だけでホントはザコなんだろうな。」

ユンフ「なんですって？」

シヨウタ「だってコンビのお前がビビりなんだから、ガリックもどうせザコだろうっ？」

ユンフ「……ガリック様をバカにすんじゃないわよ！！彼は私を助

けてくれたのよ!!」

シヨウタ（あれ〜？もしかして複雑な事情があったり？もしそんなら罪悪感が……）

ユンフ「強盗に襲われて殺されそうになったとき、ガリック様は剣の1振りで私を助けて下さった。」

シヨウタ（そこまで複雑でもないのかよ!!でもまあ、命の恩人ってわけか。それを利用して俺って……悪役？）

シヨウタ「ふん、そんなのたまたまだろ？でもガリックもかわいそうだな、お前みたいなビビりにつきまとわれて……」

ユンフ「っ!!……ええ、良いわよ。あなたの挑発に乗ろうじゃないの。そのかわり……命の保証はしないわよ!!」

そう言うとユンフは杖に土を集めて、ハンマーのような形にして俺を襲ってきた!!

シヨウタ（よし!!挑発に乗ったな。）

俺はダツシユで逃げた!!

ユンフ「ビビりはあなた……くっ目が!!」

俺は追いつかれる寸前に、ヤシャ戦の時と同じように砂を投げつけ、視界を奪った!!

シヨウタ「ウオオオ!!」

俺はファナと訓練でしたように、手も足も伸ばせるだけ伸ばして突っ込んだ!!

今までの戦いや訓練を組み合わせた、今俺に出来る1番効果的な攻撃だった。

しかし……。

ガキン!!

剣が……受け止められた!?  
ウソだろ?なんで…。

シヨウタが戸惑っていると、ユンフはそのまま呪文を言い、割と大きな土弾でシヨウタを吹き飛ばす。

シヨウタ「グハッ。……な、なんで。」

ユンフ「バカねえ、私は土の使い手よ?目に入った砂を除去するのはなんか、朝飯前に決まってるでしょ。」

シヨウタ(そうだった!!ヤバい、体が動かない)

ユンフ「ふふっ、よくもバカにしてくれたわね。覚悟なさい。死ね!!……!!」

土のハンマーが振りおろされる。目をギュツと閉じた瞬間

バキン!!

シヨウタ「えっ？なんで……」

ファナ「もう大丈夫だよ。ゴメンね危ない目に合わせて。」

ファナは俺に振り降ろされたハンマーを受け止めていた。

そのままハンマーを弾いて、ユンフの手を軽く切った。

ユンフ「っ!!」

ユンフは下がって距離をとる。

ファナ「良かったあ、シヨウタが無事で……。」

シヨウタ「ファナ、お前ガリツクと」

ファナ「危ない!!」

バツ!!

ファナが俺の後ろに飛び込んだ瞬間

ザクツ

俺は振り向くと、ガリツクの振り下ろした大剣がファナに……深々とささっていた。

シヨウタ「ウソ……だろ!? 夢と…同じことに……」

ガリツク「バカな女だ、たださえ俺に押されていたのに、あの無能力者がピンチなのを見て一目散に助けに行くなんで。」

ユンフ「この女、私の手に傷を！！でもガリック様さすがです！！倒してくれてありがとうございます！！」

シヨウタはこんな会話は聞いていない。

むしろ、聞けない。

目の前の事実を理解が追いついていないのだ。

シヨウタ（夢と同じようになるなんて。…こんなにも血が出て…俺が…俺が弱いせいでファナは…！！！）

シヨウタ「ウガアア！！死ねええ！！」

シヨウタはガリックに飛びかかった！  
が、蹴り落とされる。

シヨウタ「ウグウ！！」

ユンフ「勝てるわけないでしょう？降参すれば良いのよ……まあ許すわけではないけど」

シヨウタ（ちくしょう！！…俺はファナを助きたい！でも今の俺じゃ敵わない……こんなとき、小説とかマンガの主人公はなにかの力に目覚めるんじゃないかねえのか！？俺だって異世界に来ちまったんだ、充分主人公だろ！！なんか…なんでも良い！！ファナを助けられる力を……）

剣を強く強く握っても、どれだけ祈っても………なにも起きない。

ガリツク「ふん、そろそろ終わりに……ん？まだ生きてるのかこの娘は。」

シヨウタは急いでファナに駆け寄る。

シヨウタ「ファナ！？大丈夫か！！ファナ、ファナ！！」

ファナ「う…ゴメンね。シヨウタ…。」

ガリツク「くたばれ。」

大剣が振り降ろされる…。

なにも出来ないならせめて…と、俺はファナに覆いかぶさる。

ファナの手を握り、俺はファナを助けられない自分を呪いながら、それでも願った。(ファナを助きたい！！)

次の瞬間……。

ピカッ！！とファナが光り、シャボン玉の様なものにシヨウタごと包まれた。

ガキン！！剣が弾き返され、ガリツクは大きく後ずさる。

ガリツク「なんだこれは！？……何が起こるか分からない、距離をとるぞユンフ！！」

ユンフ「了解しました！！」

ガリツクとユンフは距離を取った。

ファナが目を覚ますと、そこは黄色いモヤモヤとした所で、夢の中  
のようだった。向こうにシヨウタが見える、なんか怪しげなフード  
の人と話してる。

ファナ「何してるの？シヨウタ！！」

呼んでも振り返ってくれない。向こうに行きたいけど、体は動かな  
かった。

ファナ（おかしいなあ？私さっきまで闘技場に居たはずなのに……。  
あの人誰だろう？大丈夫かなあシヨウタ。）

シヨウタが目を覚ますと目の前には、シヨウタを異世界に連れてき  
たフードを着た男……の横に居た、「ささやかなプレゼント」とや  
らしてくれた男が立っていた。

フードの男「はあ、遅かったなあ。お前来るの遅すぎだぞ？」

シヨウタ「はあ！？来るの遅いつてなにがだよ！！……っっていうか、  
ファナは？ファナを助けてくれよ！！」

フードの男「まあまあ落ち着けよ。回復してるよちゃんと。」

シヨウタ「え？マジでか！？ありがとう！！」

フードの男「イヤイヤ、お前の力でね。」

シヨウタ「……どういう事だよ？」

フードの男「ふっふっふ、聞いて驚けよ？なんとあのささやかなプレセントとは……お前が相手を触って祈れば、完全回復するという素晴らしい能力だったのだあ！！」

シヨウタ「なっ、なんだってえ！？」

フードの男「よし、良い驚き方だ！！」

シヨウタ「そうか。……お前のおかげで助かったよ。ありがとうな。

……ただ、このピンチは打開出来ていないんだ。このままじゃ、勝てない。」

フードの男「まあ、そう悲しむな。なんのためにお前をここに連れてきたと思っている？もう1つの力の説明をするためだぞ。」

シヨウタ「まだあるのか！？」

フードの男「そうだ！！でも、俺だってそこまでスゴイヤツじゃないから、お前1人じゃ強くなれないんだ。誰かの力を借りて強くなる能力を身につけさせたんだ。」

シヨウタ「早く教えてくれよ！！」

フードの男「かくかくしかじか」

フードの男が言ったことを整理すると、

まず、簡潔に言うと、仲間の能力がそのままシヨウタの能力となり、身体能力も上がるという能力だった。

それを使うにはまず、手を繋いで「力を貸してくれ！！」って思えば俺の力が2倍になって、相手の能力も貰える。

（相手の体は消えて、俺の中に入るらしい。）

で、もつと強くなるには願うときに相手を抱きしめて、10秒経つまでに相手も抱きしめ返してくれたら……元々の身体能力が5倍になって、しかも能力も貰えて、その能力の強さが上がる！！

（【最強】 【悟り】になる）

また、元に戻るには「戻りたい！！」って祈るだけ！！

ただ、そのあと1時間は相手が疲れて動けなくなるから、俺は介抱しないとイケないらしい。

シヨウタ「……………す、スゲエ！！！！マジでか！？スゴいな、最高だよ。これなら逆転出来るかもしれない！！」

フードの男「スゴいだろ？じゃあ、説明は終わりだ。もう2度と会わないだろうけど頑張れよ。じゃあな！」

シヨウタ「ああ、ありがとな！！」

（まだ聞きたいことはあるんだけど！！）

フードの男が居なくなると、俺達は闘技場に居た。

まだシャボン玉みたいなやつは消えてない。

フアナ「シヨウター！！体が治ったよー！！どうやったか知らないけど  
ありがとうー！！」

シヨウタ「ああ、良かったな。でも、ちょっと俺の話を聞いてくれ。  
」

シャボン玉が消えかかっている。マズイな。

フアナ「…え？別に良いけど何すれば……ってうわあー！！」

シヨウタはフアナを抱きしめる。

フアナ「ちよっ、なにやってるの！？シヨウター！？」

2人とも顔が真っ赤だが、俺は耳元でささやく。

シヨウタ「なにも聞かないで、俺の背中に手を回してくれ。」

シャボン玉が消える。抱きついてから3秒経過。

フアナ「ふえっ？そんなことしてる場合じゃ……しかも……恥ずかしいよ。」

ガリツク達が割れたことを確認して走ってくる。  
5秒経過。

シヨウタ「頼む。俺を信じてくれ。」  
7秒経過。

フアナ「でも。」

シヨウタ「大丈夫。絶対に俺がお前を守るから。」  
8秒経過。

ファナ（いつもと違う、とても真剣な顔だ。なにも能力持っていないんだよね？でも、なんでだろう……シヨウタに「守る」って言うてもらえたら、安心する。）

9秒経過。

シヨウタ（無理か！？）

ファナ「分かった、信じるね」

ファナがシヨウタの背中に手を回した。

10秒経過。

その瞬間、さつきと同様、まぶしい光が2人を包み込んだ。

ガリツク「気にするな！！どうせ、さつきのようなハッターだ！」

と、ガリツクがその光の中に大剣を降り下ろす。

ガキン！！

光が無くなり、外見は一切変わっていないシヨウタが大剣を受け止めていた。

ガリツク「な、なんでお前が……？」

シヨウタは剣を弾き、ガリツクを思いつきり蹴り飛ばす。

ユンフは急いで援護弾を撃つが、シヨウタは全て弾き、一瞬で間合いを詰めて剣の柄で頭を殴り、気絶させた。

そのままガリックヘッドッシュして、剣を打ち合う。

ガリック（何故だ！？何故いきなり強くなっているのだ！？）

ガリックは驚いていた。まあ驚くのも無理はない。さきほどまで非常に弱かったただの少年が、自分：イヤ純粋な身体能力では自分をも上回る強者になっただけだから。

今までガリックは大剣で動きが遅いが、力の強さを生かして、相手の剣技を弾き、のけぞったその隙を付いて戦っていた。

しかし、シヨウタは自分の能力で力が上がり（5倍）ファナの能力で剣を持つと力が上がり（5倍）シヨウタの身体能力は5×5で25倍にもなっているため、力でもスピードでも負けているガリックは、勝てるわけがなかった。

しかし、戦闘経験はシヨウタを遥かに凌駕しているガリックは、全く退かず、一進一退の攻防を繰り返していた。

シヨウタの身体能力は5×5で25倍にもなっているため、力でもスピードでも負けているガリックは、勝てるわけがなかった。

しかし、戦闘経験はシヨウタを遥かに凌駕しているガリックは、全く退かず、一進一退の攻防を繰り返していた。

ファナ（シヨウタ！私の声聞こえる？）

シヨウタ（ファナ！？大丈夫か！？痛かったりとかしてない？）

ファナ（うん！大丈夫だよ。それどころか、シヨウタの体の中は居心地良いよ。）

シヨウタ（体…っていつか心の中だろ？）

ファナ（どっちでもいいよ。それでね、なんとシヨウタの周辺360度どこでも見れるんだよ！！）

シヨウタ（マジで！？スゲーな！！なら後ろからの攻撃とか分かるのか。…ところでさ、…どうやって倒せばいいの？）

ファナ（ええー、俺に任せろとか行ってたのに。）

シヨウタ（うっ、…だ、だって戦闘経験ほとんど無いんだぞ！？少し戦法とか教えてよ！！）

ファナ（うん、どうしよっか？私もあんまり頭は使わないで戦うからな）。しかもさっき俺に任せろって言ってたし。）

シヨウタ（……わかったよ。頑張って倒してやるさ！！）

シヨウタ（ガリックはスピードも力も俺に負けている。なのに何故まだ戦えてるのだろう…。よし、ガリックの戦いかたを見よう）

ファナ（うん。それが良いと思う。）

シヨウタ（うおい！！1人で考えてることもフアナには筒抜けなの！？）

フアナ（らしいね）。別に良いじゃん。なんか隠し事があるってわけでもないでしょ？）

シヨウタ（無いんだけど……無いとも言いきれないんだよ………  
…こんな俺でも男の子だから。）

フアナ（えっ？…男の子って関係あるの？）

シヨウタ（……やっぱ何でも無い。話を戻すよ、今戦いながら思ったけど、ガリックは俺の剣を受ける瞬間、自分の剣の勢いを殺してる。）

フアナ（そりゃそうだよ。まともに今のシヨウタの剣を受けたら、ポッキリいっちゃうよ、剣が。）

シヨウタ（……そんなに強いのか？）

フアナ（うん、見るだけでも分かるよ。よく頑張ってるね、ガリックは。）

シヨウタ（じゃあ、それよりも強く剣を当てれば……）

シヨウタはあえて力を抑えた。

そうすれば、強く剣を当てた時に、勢いを殺しきらず大剣を折れると思ったからだ。

その状態で5分ほど剣を打ち合い、頃合いを見て、おもいつきり剣を当てた！！すると……

ボキッ！！

ファナのいう通り、大きな音がしてガリツクの大剣は折れた。

自分でも驚いているとまもなく、「降参だ」とガリツクが力なく言い、ついに勝利をおさめることが出来た！！

アナウンス「シヨウタ&ファナコンビの勝利ー！！！」

俺は歓声の中、今回は勝った人の中に俺の名前があつて良かったなと思いつつ、部屋に戻った。

ファナ（シヨウタすごかったね！とっても強かったよ！！）

シヨウタ（そうか？ありがとな！……じゃあソロソロ戻るか？）

ファナ（うん！戻して！！）

シヨウタ（実はさ、言ってなかったけど……）

（中に入った人が1時間ほど動けないことを説明）

ファナ（え〜！？そんなあ……。……でもシヨウタは居るんだよね？……だったら問題は無いかも。……はっ！！トイレとかどうすんの！？）

シヨウタ（う、確かに。どうしよう。）

ファナ（はあ。まあ1時間ならトイレくらいは我慢するよ。そのかわり、ちゃんと責任もって色々言うこと聞いたりしてよ?）

シヨウタ（あ、ああ!大丈夫!俺はちゃんと責任取るよ!）

ファナ（ブハッ!）

シヨウタ（ん?なんでソコで嘔くの?）

ファナ（そんな言い方じゃまるで……。良かった、私の心の中はシヨウタにバレなくて。）

シヨウタ（おお、いい、ファナ?返事してよ。）

ファナ（ゴメンゴメン、ちょっと考え事を。……。じゃあ元に戻して!）

シヨウタ（うん!『元に戻ってくれ!』）

ピカッと一瞬だけ光り、目の前にファナが現れた。

……。なぜか全裸で。

……。あつれー?おつかしいなあ?幻覚かな?疲れてるからかな?服が地面に落ちてて全裸のファナが見える気が……。

ファナ「シヨウタ?どうしたの……。ってキャー!!!見な……。いで……。バタッ

なんとファナは裸でシヨウタにもたれかかった!!

シヨウタ（ヤバいやバーーーー！！ちょっと待ってマジでー！！）

ファナ「はあ、はあ、はあ。」（体がキツいたため息切れ中）

シヨウタ（うあゝー！！マズイってばマジでほんとにー！！なんで立ち上がらないんだ……ってそうか、体がキツくて動けないのかー！！！と、とにかくベッドに連れていかないとー！！）

シヨウタはギリギリ届くところに小さな布があったため、それで目隠しをする。

シヨウタ「良し！もう見えないから安心してー！！」

ファナ「う…うん。はあ、はあ」

シヨウタはお姫さま抱っこで、辛そうなファナを抱き上げ、ベッドに行った。

しかし、目が見えないため、ベッドの前で止まることが出来なかった。

ガッ

足がベッドに当たってバランスを崩したー！！

シヨウタ「うわああー！！」

ファナ「キャアー！！」

2人はもつれこみ、そのまま倒れこんでしまった!!

……体制がマズイ。目隠ししても大体はわかる。ファナは仰向けに倒れ、覆い被さるようにシヨウタが四つん這いになっている。

はたから見たら……ヤバくね？

サヤカ「ファナ！スゴいです!!よく勝てましたね。シヨウタも見直しま……した……よ？」

シヨウタ（ゲツ！この声はサヤカ!?目が見えないから、今の状況分からないけど、めっちゃめっちゃ嫌な予感がする!!しかも見えねえから攻撃も来たら避けれねー!!）

サヤカ「……せつかく……見直したって褒めようと思ってたら……あなたはまた……!!（- -#）」

シヨウタ「ちがつ、待て俺は………ほ、ほら!!俺は目隠ししてるから、全然なにがなんだか分からないし!!やましい気持ちなんてこれっぽっちも……ギャアアア!!!!!!」

サヤカの風魔法（ハンマーみたいな威力のある風）による、シヨウタの断末魔が部屋にこだました。

（数分後）

サヤカ「ふう〜ん、知らなかった、ねえ。ホントなんでしょうか?……でも!!知らなかったにせよ、悪いことしてるんだから怒るべきです!!……大体、男子的に嬉しいシチュエーション味わってるんですから、プライマイゼロです。」

シヨウタ「ふざけんな!!! 確かにフアナには悪いと思ってるけど、こちらら目隠ししてて状況は全く分かんなかったんだよ!!! なのにいきなりぶっ飛ばしやがって、何がプライマイゼロだ! 余裕でマイナスだよ!!!」

サヤカ「何言ってるんですか!!! あれは警察呼ばれてもおかしくないですよ!?!」

シヨウタ「うぐっ……で、でも! 少しくらい謝れよ!!! ぶっ飛ばしたんだから!!!」

サヤカ「うぐ、確かに謝らないといけないかもしれないです。……でもイヤですう! 私絶対謝りませんから!!!」

シヨウタ「もはや理屈も何も無いじゃねーかよ!!! 腹立つなお前は」  
「!!!」

フアナ「あはは……私を無視しないでよ……。」

フアナ（……でも、私を抱きしめてくれた時のシヨウタは……ちよつとカツコよかつたかも。）

と、さっきまでのカツコ良さが微塵も感じられないシヨウタを見ながら、フアナはそう思っていた。

7話 2戦目!!後編(後書き)

色々説明長くて分かり辛かったかもしれないです。

あといきなりですけど、ちょっと受験の関係で、1話1話の更新がかなり遅くなります。

ホントにスイマセン!!

でも絶対この小説は続けていきますので、これからも応援してください。よろしくお願ひします!!

追伸(小説の中とかに、もしかしたら方言とか入ってるかもです。もし見つけたら教えてください。)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7504x/>

---

ミス・スタート・ストーリー

2011年11月8日02時11分発行